

# 日本甲虫学会第 15 回大会 講演要旨集

The 15th Annual Meeting of the Coleopterological  
Society of Japan  
Abstract



倉敷市立自然史博物館  
倉敷市立美術館

2025年11月15-16日

## 日本甲虫学会第 15 回大会講演要旨集目次

連絡事項	3
会場案内図	6
プログラム	9
講演要旨	14
一般講演	14
論文賞記念講演	23
ポスター発表	23
公開シンポジウム	28
分科会	29
大会参加者名簿	34

---

日本甲虫学会第 15 回大会事務局 〒 710-0046 岡山県倉敷市中央 2-6-1

倉敷市立自然史博物館（担当：奥島雄一）

メール: [musoku@city.kurashiki.okayama.jp](mailto:musoku@city.kurashiki.okayama.jp)

電話 : 086-441-5376 FAX : 086-425-6038

後援：倉敷市教育委員会

---

表紙デザイン：オオキバミイロカッコウムシ，♂

*Elasmocylidrus takedaorum* Murakami & Gerstmeier, 2020

(2025 年, デジタルペインティング／絵・デザイン：たかはしまいまい)

岡山県岡山市から 2020 年に記載された種である。早春にアラカシなどの枯れ枝に現れる様子を再現した。日本甲虫学会の和文誌・さやばね 51 号に生態的知見が掲載された。

・倉敷市立自然史博物館 2 階第 3 展示室の話題の虫コーナーでは本種を展示中で、大会期間中もご覧いただけます。また下記のパオちゃん's EYE（倉敷市立自然史博物館発行）では、本種と本作品について紹介されています。併せてご覧ください。

パオちゃん's EYE <https://www.city.kurashiki.okayama.jp/musnat/learning/1009020.html>

・令和 8 年 2 月から倉敷市立自然史博物館で「たかはしまいまい昆虫絵本画展」が開催予定です。

# 連絡事項

## 受付

博物館地階講義室にて、11月15日9時30分より大会受付を開始します。大会参加費や懇親会費などはこちらでお支払いください。

### ○大会参加費（学会員外の方もご参加いただけます）

一般・大学生（院生）：1,000円

高校生以下：無料

### ○懇親会参加費 7,000円（懇親会の10月15日以降のお申込みは1,000円増し）

## 名札

大会受付で、名札をお受け取りください。名札は大会参加証ですので、館内および懇親会会場では着用をお願いします。大会受付を済ました方は、大会期間中、倉敷市立自然史博物館の展示（9時～17時15分）を無料でご観覧いただけますので、館の受付で名札をご提示ください。

## 口頭発表

口頭発表は質疑を含めて15分です（1鈴10分、2鈴12分、3鈴15分終了）。時間厳守でお願いします。ご持参のPCを会場のプロジェクターに接続してご使用ください。操作は発表者でお願いします。プロジェクターへの接続はHDMI端子ケーブルを用意します。Mac使用やタブレット使用の場合には対応アダプタを必ず持参ください。口頭発表を終えられた方は次の発表の座長をご担当ください（各セッションの初めの発表の座長はスタッフが担当します）。会場の皆様は、質疑の際には挙手の後、会場係の者からマイクを受け取り、ご発言ください。

## 公開標本同定会（どなたでも無料で参加できます）

大会2日目：11月16日（日）10:30～12:00

甲虫の各分類群の専門家がその場で標本の同定を行います。データラベルの付いた標本に限らせていただきます。タトウなどマウントされていない標本はご遠慮ください。

お申し出のあった同定協力分類群：オサムシ科ゴミムシ類/水生甲虫/タマムシ科/コメツキダマシ科・コメツキムシ科（Eucnemidae & Elateridae）/ジョウカイボン科/エンマムシ科/ガムシ科/ハネカクシ科/ハネカクシ科アリヅカムシ亜科/ナガシンクイムシ科/カッコウムシ科・サビカッコウムシ科/ニセクビボソムシ科/ツチハンミョウ科/テントウムシ科/ケシキスイ科/オトリブミ科/キクイゾウムシ亜科/キクイムシ亜科。（引き続きご協力受付中）

大会に参加される皆様には、講師として広くご協力を願いいたします。

## ポスター発表

ポスターは幅 115cm、高さ 172cm の枠内に収まるようご準備ください。美術館第 2 会議室 B にポスター掲示用のポスターボードを並べています。ご自身での掲示をお願いします。掲示用品（画鉛）は会場に用意します。1 日目から掲示可能ですが、2 日目のコアタイム前には、必ず掲示してください。コアタイム時には、来場者への説明や質疑応答をお願いします。2 日目 15 時までに撤収してください。

## 公開シンポジウム（2 日目、どなたでも無料で参加できます）

「甲虫はいったい何種いるのか？ 一目録を作る・使う・アップデートするー」

大会 2 日目：11 月 16 日（日）13:00～15:00 担当：千田喜博

登壇者：千田喜博（庄原市立比和自然科学博物館客員研究員）・鈴木茂（「日本列島の甲虫全種目録」管理人）・吉富博之（愛媛大学ミュージアム教授）・藤本博文（瀬戸内むしの会）

## 分科会（2 日目）

カミキリ分科会・ゾウムシ分科会・ハネカクシ分科会・ゴミムシ分科会・水生甲虫分科会・雑甲虫分科会が予定されています。参加希望者は人数把握のため交流室（博物館地階講義室）の名簿にご記入ください。会場等詳細は、2 日目に博物館地階交流室黒板でご案内します。

各会場にプロジェクターは準備しますが、PC は原則演者か司会者でご準備いただき、接続するようにしてください。

## 交流室

博物館会場地階講義室は大会受付兼交流室としてご利用いただけます（開設は 1 日目 17 時まで、2 日目 15 時まで）。連絡事項は交流室に掲示します。

## 昼食など

会場周辺の飲食店、コンビニをご利用ください。美術館会場 1 階には軽食喫茶があります。所定の場所以外での飲食は禁止です。持ち込みの食事は博物館 1 階観光休憩所または地階講義室（交流室）をご利用ください。館内での飲酒はご遠慮ください。会場建物内はすべて禁煙となっています。喫煙は、観光バスの駐車場そばの指定喫煙所（美観地区の西側倉敷中央通り沿い）をご利用ください。

## 懇親会

大会 1 日目、18 時より、倉敷ロイヤルアートホテル（倉敷市阿知 3-21-19、会場より JR 倉敷駅寄り徒歩 3 分 <https://royal-art-hotel.co.jp/>）にて開催します。参加される方は、必ず名札をお持ちください。懇親会印の名札のない方は入場できません。なお、懇親会参加費は前出の『参加費』の項目で情報を掲載しております。また、懇親会参加費は大会参加費とともに

に、当日、会場受付にてお支払いをお願いします。

### 宿泊

事務局では宿泊の斡旋はしませんので、ご自身で宿泊施設をご予約ください。

### その他

★自然史博物館 1F 併設の観光案内所などにコインロッカーが設置されています。必要な方は利用可能時間や料金などをよくご確認いただいた上でご利用ください。

★倉敷昆虫館の見学が可能です（9時30分～17時、13時～14時休）。大会会場から北東へ約1kmのしげい病院1階にあります。岡山県産の古くからの標本や地方の同好会誌などが充実しています。昆虫館入り口は、しげい病院東側になります。詳細は下記ホームページをご参照ください。

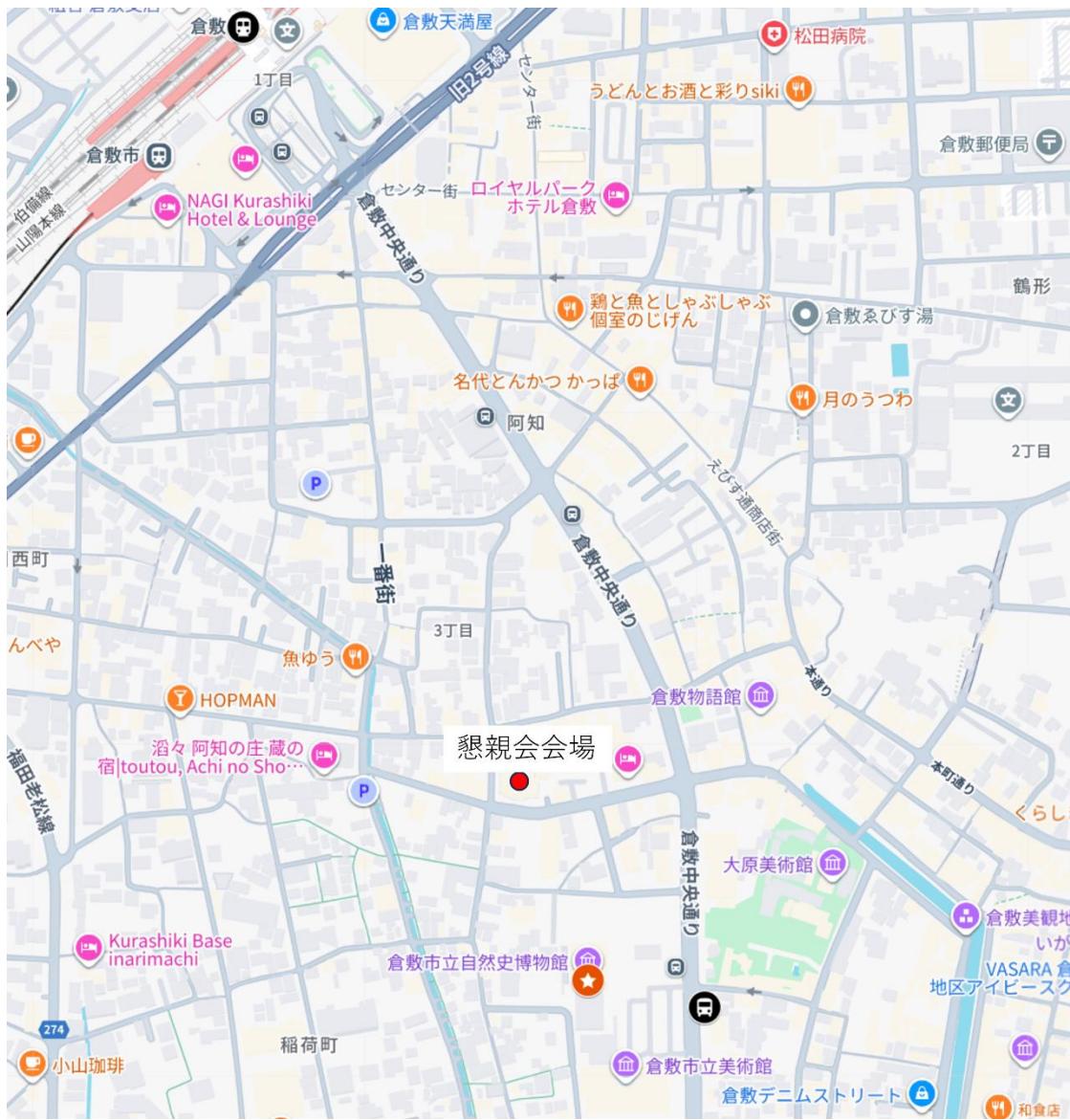
TEL 086-422-8207 URL [http://www.shigei.or.jp/ento\\_museum/](http://www.shigei.or.jp/ento_museum/)

★岡山大学附属図書館資源植物科学研究所分館（旧大原農研）が利用いただけます（9:00～17:00）。大会会場から南へ約200m。昆虫関係の古い文献が充実しています。コピー可。大会当日（土日）は休館日ですが、前後の平日のみ開館しています。

TEL 086-434-1204 URL <http://www.lib.okayama-u.ac.jp/ipsrlib/index.html>

★会場から倉敷駅周辺には、美観地区、大原美術館、アリオ・MOPなどの観光地や大型ショッピングモールなど見どころもたくさんあります。

# 会場案内図



## 会場地図

下記の Google マイマップからもご確認いただけます :

[https://www.google.com/maps/d/u/0/viewer?mid=11TenamSPlQzsEcGy\\_OEj76cAjD5-V0&femb=1&ll=34.597775003872684%2C133.76810360000002&z=16](https://www.google.com/maps/d/u/0/viewer?mid=11TenamSPlQzsEcGy_OEj76cAjD5-V0&femb=1&ll=34.597775003872684%2C133.76810360000002&z=16)

## 倉敷駅から徒歩・バス

南へ徒歩 800m (約 10 分).

路線バス「大原美術館前」下車.

倉敷駅の列車時刻や運行情報は、以下の JR おでかけネットから、「11月15日（土）」「11月16日（日）」に日付を指定してご確認ください。

<https://eki.jr-odekake.net/top?id=0650612>

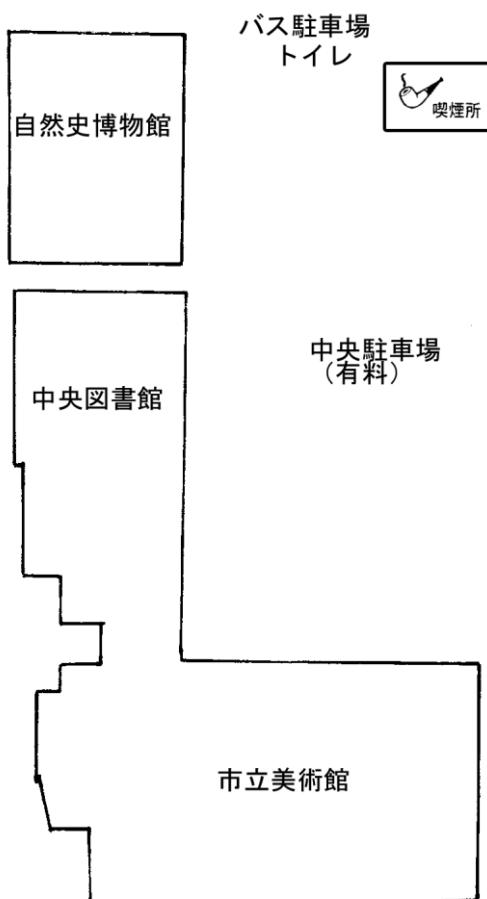
### 新幹線をご利用の場合

岡山駅か新倉敷駅で山陽本線に乗り換え、倉敷駅で下車してください。

### 自家用車でお越しの方

自家用車をご利用の方は、付近の有料駐車場またはホテルの駐車場をご利用ください。有料駐車場としては、市営美觀地区南駐車場（下記のリンク）が便利です。

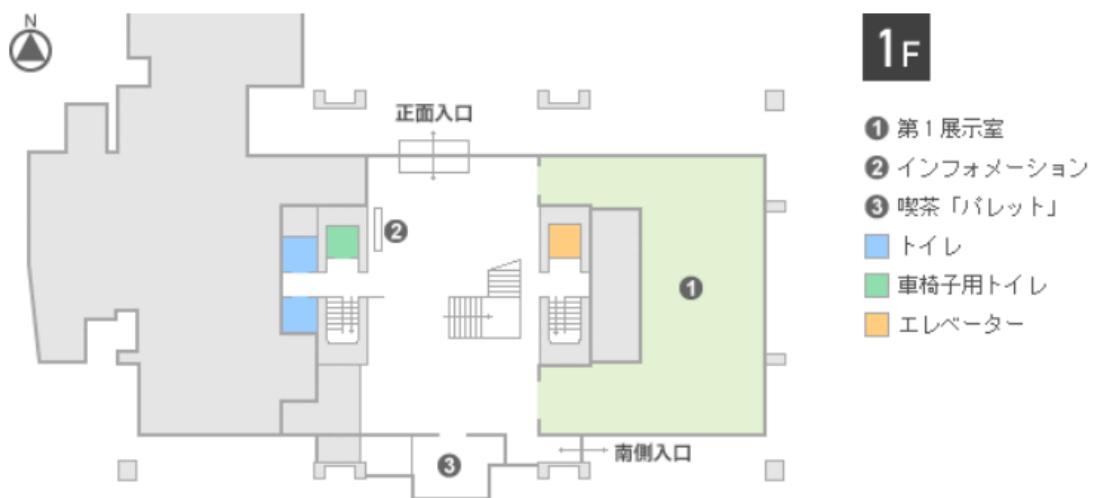
<https://kmc.jp.net/service/parking/geibunkan>



## 倉敷市立自然史博物館会場



## 倉敷市立美術館会場（大会会場は3 F）





## プログラム

### 大会日程（予定）

時間や会場は変更になることがありますのでご注意ください。変更内容は当日、大会受付（博物館講義室）に掲示します。

1日目：11月15日（土）

9:30～ 受付開始（博物館地下講義室）、ポスター掲出（美術館3階第2会議室B）

10:00～12:00 評議員会（美術館3階第2会議室A）

同上 一般講演（美術館3階講堂）

13:00～15:00 総会・学会賞授与式・受賞講演（美術館3階講堂）

15:15～16:45 一般講演（美術館3階講堂）

18:00～20:00 懇親会（倉敷ロイヤルアートホテル）

2日目：11月16日（日）

9:15～10:30 一般講演（美術館3階講堂）

10:30～12:00 ポスター発表コアタイム（美術館3階第2会議室B）

同上 公開標本同定会（美術館3階第2会議室A）

同上 日本昆虫分類学会総会（美術館3階第1会議室）

13:00～15:00 公開シンポジウム（美術館3階講堂）

15:15～16:45 分科会（会場は当日案内します）

### 【一般講演：口頭発表】

（1日目）10:00～12:00 （美術館3階講堂）

O1-1 濑島勇飛（都立大・理・動物系統）

リュウキュウツヤハナムグリにおける統合分類学的研究

O1-2 重藤裕彬（北大・昆虫体系）

オオバヤドリギを摂食する日本産ハムシ類（コウチュウ目ハムシ科）

O1-3 ○中田勝之（石川県白山自然保護センター）・金子直樹（自然環境研究センター）

石川県白山の地上式衝突板トラップ（FIT）で採集されたコガネムシ類（コウチュウ目）

O1-4 ○関 嶺大（九大院・生資環・昆虫）・丸山宗利（九大博）

日本産ダニヒメテントウ族 *Stethorini*（テントウムシ科：テントウムシ亜科）の分類学的  
再検討

O1-5 中島 淳（福岡県保環研）

ヒメドロムシ相を指標とした大規模出水と河川改修の影響評価

O1-6 ○三木巴月（兵庫県大院・環境人間）・山田量崇（兵庫県大／兵庫県博）

兵庫県から得られた *Xyleborinus* 属（ゾウムシ科：キクイムシ亜科）不明種の形態と発生  
消長

O1-7 ○平井幸成（東農大・院・昆虫）・岸本年郎（ふじのくに地球環境史ミュージアム）

静岡県とその周辺地域におけるアバタコバネハネカクシ属（ハネカクシ科アリガタハネ  
カクシ亜科）について

O1-8 ○青井光太郎（都立大院・理・動物系統）・吉田貴大（愛媛大学ミュージアム）

日本・台湾産ハネナシメツブテントウ属 *Nesolotis*（コウチュウ目テントウムシ科）の分類  
学的研究

（1日目）15：15—16：45（美術館3階講堂）

O2-1 中村 涼（東大院・農・森林動物）

日本産 *Escalerobia* 属（ニセクビボソムシ科）の多様性

O2-2 野村周平（国立科学博物館）

日本とミャンマーにおけるチビシュモクアリヅカムシ属（和名新称）*Euplectomorphus* の  
発見（ハネカクシ科アリヅカムシ亜科）

O2-3 ○吉富博之（愛媛大学ミュージアム）・林 成多（ホシザキグリーン財団）・山迫淳介  
(農研機構植物防疫研究部門)

隠岐諸島のカミキリムシ

O2-4 ○佐藤勇哉（九大院・生資環・昆虫）・丸山宗利（九大博）

日本産ナガハネカクシ属における雌の形態形質

O2-5 橋爪拓斗（九大院・生資環・昆虫）

ヒゲブトハネカクシ亜科のタイプ標本の検討から明らかとなった分類学的課題の事例

O2-6 和田 薫（明星大学）

"さあ、子どもたちと虫とり（撮り・採り）に行こう！

～自然体験の枯渇の現状からの打開をめざして～"

(2日目) 9:15~10:30 (美術館3階講堂)

- O3-1 ○淺野悟史 (京大院・地球環境学)・时任美乃理 (京大院・農)・前長邑佑 (京大院・農)・西前 出 (京大院・地球環境学)  
ルリクワガタ類の定量調査結果に及ぼす気象条件の影響
- O3-2 ○前長邑佑 (京大・農・森林科学)・时任美乃理 (京大院・農・森林利用)・浅野悟史 (京大院・地球環境学堂・地域資源計画論)・西前 出 (京大院・地球環境学堂・地域資源計画論)  
ルリクワガタ類に対する広葉樹林業の攪乱影響: 時空間スケールでの分析
- O3-3 ○岡本悠哉 (駒大高)・海老澤慎一 (駒大高)  
伊豆大島のハンミョウ相
- O3-4 ○前野朴春 (人間環境大学環境科学部フィールド生態学科)・久松定智 (人間環境大学環境科学部フィールド生態学科)  
剛毛式 Chaetotaxy を用いた日本産オオキスイムシ科の幼虫形態の比較 (コウチュウ目, ケシキスイ上科)
- O3-5 ○花井真希人 (九大・生資環・昆虫)・安藤清志 (愛媛大・農・昆虫)・丸山宗利 (九大博)  
マレー半島で発見された *Lycidioides* 属 (ゴミムシダマシ科: ナガキマワリ亜科: ニジゴミムシダマシ族) の未記載種について

### 【論文賞記念講演】

(1日目) 13:00~15:00 (美術館3階講堂)

受賞論文 : AKIYAMA, H., T. NIISATO & W.-I CHOU.

Taxonomic Study of the Family Oedemeridae Latreille, 1810 (Coleoptera, Tenebrionoidea) in Taiwan. Elytra, new series, 14(2): 123-206.

### 【ポスター発表】

(2日目) 10:30~12:00 (美術館3階第2会議室B)

- P-1 ○芦田 久 (近畿大学生物理工学部)・稻畠 憲昭 (京都市)  
関門海峡は地下浅層性チビゴミムシにとって大きな障壁ではない
- P-2 ○松村健太郎 (東大院・総合文化)・竹内成太 (香川大院・農)  
オオツノハネカクシの形態における性的二型性および同性内多型性に関する研究
- P-3 ○中倉響希 (徳島科学技術高)・○立石伶菜 (徳島科学技術高)  
徳島県のコガタノゲンゴロウ (*Cybister tripunctatus lateralis*) を絶滅の危機から救え!
- P-4 ○橋本晃生 (杏林・DSセ)・伊藤 慎 (杏林大・保健)・西田 豊 (杏林大・DSセ)・吉田清隆 (杏林大・DSセ)  
河岸域における地表徘徊性甲虫の分布特性と水面離陸行動との関連性

- P-5 ○本間隆太（酪農学園大大学院・酪農学専攻）松林 圭（酪農学園大・環境共生学類）  
甲虫における分布境界線はどこか～プラキストン線から石狩低地帯までの植生と分布の  
検証
- P-6 ○山田 航（厚木市）・佐伯智哉（横浜市）  
ウンモンナガタマムシ（タマムシ科ナガタマムシ属）の再発見と生態的知見
- P-7 ○武田雅生（岡山県）・○武田寛生（岡山県）  
オオキバミイロカッコウムシの生態とナガシンクイムシ科の数種について
- P-8 ○柳沼嘉偉斗（九大院・地社）・北野 忠（東海大・教養）・苅部治紀（神奈川県博）・  
荒谷邦雄（九大院・比文）  
テラニシオナガミズスマシの分類学的再検討
- P-9 苅部治紀（神奈川県博）・河合秀樹（神奈川昆虫談話会）・○高橋和弘（平塚市）・加賀  
玲子（神奈川県博）・渡部哲史（九大院）  
顕在化する急激な温暖化、乾燥化が甲虫に与える影響
- P-10 西原昇吾（中大・理工）  
防災重点ため池廃止が水生甲虫に及ぼす影響
- P-11 ○奥島雄一（倉敷市立自然史博物館）・岡本泰典（岡山市）  
甲虫学者大林一夫氏から黒田祐一氏に宛てられた書簡

### 【シンポジウム】（担当：千田喜博）

（2日目）13:00～15:00（美術館3階講堂）

- S-1 千田喜博（庄原市立比和自然科学博物館）  
目録は「いきて」いる 一趣旨説明にかえて—
- S-2 鈴木 茂（岡山市）  
「日本列島の甲虫全種目録」の愉しみ方
- S-3 吉富博之（愛媛大・農・環境昆虫）  
甲虫界のこれまでとこれから
- S-4 藤本博文（瀬戸内むしの会）  
香川県での甲虫相調査 一地域ファウナ屋の視点から目録作成を考える—

### 【分科会】

（2日目）15:15～16:45

※各分科会の会場は当日、参加者募集後、決定します。

#### ○カミキリ分科会（司会人：山迫淳介）

- D-1 斎藤秀生（千葉県習志野市）  
「日本のヒメハナカミキリ」最新の分類体系の紹介と今後の研究課題

D-2 原田惇作（東京都）

セスジヒメハナカミキリ種群とフタオビヒメハナカミキリ類について

○ゾウムシ分科会（世話人：的場 縢）

D-4 井上修吾（九大）

枯れ木以外を利用するキクイゾウムシ亜科の多様性

JWIN（日本ゾウムシ情報ネットワーク）の総会

○ハネカクシ分科会（世話人：野村周平）

D-5 ○奥村哲偉（九大・農・昆虫）、丸山宗利（九大博）

九州産ヒメミズギワヨツメハネカクシ属 *Lesteva*（ハネカクシ科:ヨツメハネカクシ亜科）  
の分類

D-6 ○松木佑太（九大院・生資環・昆虫）・丸山宗利（九大博）・野崎 翼（九大院・生資  
環・昆虫）

サスライアリと共生する好蟻性ハネカクシ *Dorylophilina* 亜族の多様性

D-7 野村周平（国立科学博物館）

佐賀県における西田光康氏の FIT によるハネカクシ採集

○ゴミムシ分科会（世話人：内田脩太）

D-8 内田脩太（NPO 行徳自然ほごくらぶ）

中部山岳地帯におけるゴミムシ相の解明（予報）

○水生甲虫分科会（世話人：吉富博之・林 成多）

D-9 林 成多（ホシザキグリーン財団）

ダルマガムシやヒメドロムシの形態観察方法

D-10 ○森本涼介（島根県中山間 C）・宮永龍一（島根大・生物資源）

島根県におけるセマルヒメドロムシ成虫の季節動態および幼虫の発育期間

D-11 萩島悠介（北九州市立自然史・歴史博物館）

日本産水生ガムシ科の DNA バーコード領域の解析

○雑甲虫分科会（世話人：中村 涼）

D-12 中村 涼（東大・農）・久保田耕平（平成国際大・法）

日本産アオジョウカイ属 *Themus*（甲虫目ジョウカイボン科）の分類学的再検討

D-13 高橋和弘（神奈川県）

オイケクビボソジョウカイの系統と襲速紀要素分布について

D-14 田村竜土（愛媛大学）

ナガムクゲキスイの正体

## 講演要旨

### 一般講演（美術館 3 階講堂）

1 日目 10:00～12:00 8 講演

#### O1-1 リュウキュウツヤハナムグリにおける統合分類学的研究

瀬島勇飛（都立大・理・動物系統）

リュウキュウツヤハナムグリ *Protaetia (Pyropotosia) pryeri* (Janson, 1888)は、南西諸島に広く分布し、島嶼ごとに 9 亜種が認められている (Ochi & Kusui, 2024). しかし、これらは形態に基づいた分類であり、各亜種の遺伝的な分化程度や系統関係は未検討であった。

本研究では、9 亜種のうち 8 亜種を用いて、ミトコンドリア COI 領域の一部 (797 bp) による分子系統解析を実施した。その結果、本種は高い支持率で 4 つのクレード（トカラ列島～徳之島+八丈島、沖永良部島、沖縄諸島、宮古諸島）に分かれることが判明した。各クレード間の遺伝的距離は 4.8-8.0% であり、他のハナムグリ類では種として分けられる程度の遺伝的な分化が見られた。また、これらの形態を再評価した結果、背面の点刻、腹面の斑紋、雄交尾器の形状により識別可能であった。以上から、従来 1 種とされていたリュウキュウツヤハナムグリは 4 種へ整理されることが示唆された。加えて、各クレード内の亜種分類についても形態比較により検討し、その妥当性を評価した。

#### O1-2 オオバヤドリギを摂食する日本産ハムシ類（コウチュウ目ハムシ科）

重藤裕彬（北大・昆虫体系）

半寄生性植物であるオオバヤドリギ *Taxillus yadoriki* (オオバヤドリギ科) は本州 (関東以西) から琉球列島にかけて分布しており、都道府県によっては絶滅危惧種または準絶滅危惧種とされている。これまで、オオバヤドリギ科植物を利用するハムシ類に着目した研究は少なく、オーストラリアから *Cadmus* 属 (ツツハムシ亜科) (Reid, 2017), アジアから *Dermachus* 属 (ヒゲナガハムシ亜科) (Mushtaque & Baloch, 1979; Jolivet & Hawkeswood, 1995; Lee & Chen, 2023) が同科植物を利用する事が知られている程度である。また、日本産種に限ればオオバヤドリギ科植物を利用するハムシ類については全く報告されておらず、本科植物を中心としたハムシ類の多様性は不明であった。

近年、奄美大島においてオオバヤドリギを利用するチビタマムシが記載されたことにより (Kato & Kawakita, 2023), 日本の甲虫研究者の間で本植物が着目されるようになった。その結果、本州から琉球列島にかけて、3 亜科 9 種・亜種のハムシ類がオオバヤドリギから得られたが、これらの種が本植物とその寄主植物のどちらを摂食しているのかは確認されて

いなかった。そこで、これらの種について飼育下でオオバヤドリギの葉を与えたところ、ツツハムシ亜科およびサルハムシ亜科に属する3種：キボシツツハムシ基亜種 *Cryptocephalus* (*Cryptocephalus*) *perelegans* *perelegans* Baly, 1873, *Cryptocephalus* sp., サクラサルハムシ *Cleoporus variabilis* (Baly, 1874)が同植物を摂食することが確認された。また、九州において採集された *Cryptocephalus* sp. について詳細に検討した結果、未記載種であることが判明した。

#### O1-3 石川県白山の地上式衝突板トラップ(FIT)で採集されたコガネムシ類(コウチュウ目)

○中田勝之（石川県白山自然保護センター）・金子直樹（自然環境研究センター）

2024年5~9月、石川県白山の標高650~1180mの林内にて、標高約100mごと7地点に衝突板面積600mm×350mmの地上式FITを6基設置した結果、3科22属36種551個体のコガネムシ類が確認された。地点ごとの種数と個体数について、650m地点では24種131個体、1180mでは13種53個体と標高が上がるにつれて減少傾向が見られた。

季節消長は全体として季節が進むにつれて種数、個体数ともに減少することが確認された。標高1000m以下では特にその傾向が強く、標高1000m以上では、減少傾向とともに2回のピークが確認された。

なお、高羽（1998）でまとめられた石川県内のコガネムシ類132種について、今回確認された36種のうち11種が未記録であった。その11種のうちコヒゲナガビロウドコガネ西日本亜種は従来、近畿地方以西のみから記録され、中部地方以北からの記録がなかったが、今回4地点で7個体採集されるなど、FIT調査の有効性が示唆された。

#### O1-4 日本産 ダニヒメテントウ族 Stethorini (テントウムシ科: テントウムシ亜科) の分類学的再検討

○関 峻大（九大院・生資環・昆虫）・丸山宗利（九大博）

ダニヒメテントウ族 Stethorini Dobzhansky, 1924（以下、本族）は、*Stethorus* Weise, 1885 および *Parastethorus* Pang & Mao, 1975 の2属からなり、そのうち *Stethorus* 属は、*Stethorus* 亜属と *Allostethorus* 亜属に分類される。日本からは、これまでに5種（前亜属3種、後亜属2種）が知られている。本族の種は、主にハダニ類を捕食する重要な天敵昆虫であるが（Kapur, 1948; Gordon & Chapin, 1983 ほか）、体長が約1mmと極めて小型で、全身がほぼ黒色のため同定が難しい（Vidya et al., 2022 ほか）。また、日本産の本族の同定は、*Stethorus* 亜族2種を除き、いまだに Sasaji(1971)の描画による図解に依存しており、鮮明な写真等を用いた現代的な分類学的研究が行われていない。今回、演者らは日本産本族の標本を多数検討し、日本未記録属であった *Parastethorus* 属を含む8種を確認した。*Stethorus* (*S.*) *japonicus* および *S.* (*S.*) *aptus tsutsuii* は、*S.* (*S.*) *siphonulus* の新参同物異名であることを明らかにした（和名はキアシダニヒメテントウ）。本研究の成果は *Acta Entomologica Musei Nationalis Pragae* に投稿中である（Seki & Maruyama, submitted）。

## O1-5 ヒメドロムシ相を指標とした大規模出水と河川改修の影響評価

中島 淳（福岡県保環研）

大規模出水と河川改修が生物相に与える影響を評価するため、水質や環境構造に対する選好性が高いヒメドロムシ科を指標とし、筑後川水系 13 地点において 2021 年から 2025 年の夏季・秋季・冬季に合計 12 回、タモ網を用いた 10 分間の見つけ採りを行った。全 156 回の調査で、13 種 708 個体が得られた。個体数及び種数は夏季及び秋季に多く、冬季に減少した。種組成からみると、河川改修が行われた地点で飛翔性種の割合が高い傾向が確認された。次いで、個体数及び種数が多かった夏季及び秋季の調査結果を用いて、大規模出水が生じず河川改修が行われなかった地点（未攪乱）、大規模出水が生じたものの河川改修が行われなかった地点（自然攪乱）、大規模出水が生じ河川改修が行われた地点（人為攪乱）の 3 区に分類し、個体数、種数及び多様度指数の平均値を比較した。その結果、未攪乱と自然攪乱の間には、いずれの平均値においても有意差は認められなかった。しかし、自然攪乱と比較して人為攪乱ではいずれの平均値も有意に低い値を示した。このことから、ヒメドロムシ相においては、大規模出水の影響は小さいものの、河川改修が悪影響を及ぼす可能性が示唆された。

## O1-6 兵庫県から得られた *Xyleborinus* 属（ゾウムシ科：キクイムシ亜科）不明種の形態と発生消長

○三木巴月（兵庫県大院・環境人間）・山田量崇（兵庫県大／兵庫県博）

*Xyleborinus* 属はキクイムシ亜科の *Xyleborini* 族に含まれ、世界に約 80 種、日本に 6 種が知られる。日本産本属の種のうち最も普通に見られるサクセスキクイムシ *X. saxesenii* は、樹幹部や果実に穿孔する農業害虫として知られている。また、海外では本属の多数の種が外来種として報告されているため、日本への侵入可能性が懸念される。このような害虫の管理や外来種の早期発見のためにも日本産本属の多様性解明が重要である。今回、兵庫県神戸市における誘引式トラップで得られた標本から、日本産の既知種と識別可能な不明種が 1 種認められた。本種は、同一地点で見られるサクセスキクイムシに酷似するが、上翅斜面部の 3, 5 列目のみが翅端部まで棘を有するという点で明確に区別された。本講演では、本属の不明種 1 種を日本産 5 種、特にサクセスキクイムシと外部形態に基づいて比較検討した結果と、2024～2025 年に行った誘引式トラップによる発生消長の結果について発表する。

## O1-7 静岡県とその周辺地域におけるアバタコバネハネカクシ属（ハネカクシ科アリガタハネカクシ亜科）について

○平井幸成（東農大・院・昆虫）・岸本年郎（ふじのくに地球環境史ミュージアム）

アバタコバネハネカクシ属 *Nazeris* は後翅が退化し飛翔能力を欠くため、地域による種分化が生じ、種ごとの限定された分布を示す。日本産は 32 種 6 亜種が知られるが、種間の外見的差異は僅少で、種の同定は雄交尾器や第 8 腹板などの詳細な観察が必須であった。静岡

県周辺は伊豆半島固有種 2 種を含む 10 種が記載されるなど、その多様性は高い一方、検討が不十分な地域も多く残されていた。

そこで本研究では、静岡県周辺地域の本属を精査し、その多様性と分布状況を解明するとともに、同地域に産する種の雌の同定形質の探索を試みた。結果、既知種 10 種に加えて 3 種の不明種を確認し、さらに、一部の種群では雌雄交尾器の形態に地理的変異が存在していることが明らかになった。加えて、同地域における雌の同定形質を見出すことができた。本発表では、これらの新知見に基づき、静岡県周辺における本属の種多様性の実態と分布について報告する。

#### O1-8 日本・台湾産ハネナシメツブテントウ属 *Nesolotis* (コウチュウ目テントウムシ科) の分類学的研究

○青井光太郎 (都立大院・理・動物系統)・吉田貴大 (愛媛大学ミュージアム)

ハネナシメツブテントウ属 *Nesolotis* Miyatake, 1966 (テントウムシ科テントウムシ亜科メツブテントウ族) は体長 1.2~2.2 mm 程度の小型の属で、これまでに 18 種が記載されている。東洋区（東および東南アジア）に分布し、日本からは 4 種、台湾からは 2 種の記録がある。発表者は日本および台湾産本属の未知種を複数得ており、それらを含む日本・台湾産本属のミトコンドリア DNA の COI 領域による系統解析と ASAP による種区分解析を行った。その結果、種区分解析によって日本産は 11 暫定種、台湾産は 6 暫定種に分けられ、従来の種の認識よりも多くの種が存在することが示唆された。沖縄島には従来キイロメツブテントウ *N. azumai* 1 種が分布すると考えられていたが、沖縄島周辺の個体群は大きく 3 暫定種に分かれることが示唆された。さらに、そのうちの 1 暫定種は、トカラ列島のニセクロメツブテントウ *N. punctifrons* とともにクレードを形成していた。本発表では系統解析・種区分解析の結果を参考に、より詳細な形態観察や他の手法の解析を行い、妥当な種分類について考察する。また、本属では未発見だった幼虫形態や、色彩変異、新分布地、生態的な知見についても併せて報告する。

### 1 日目 15:15~16:45 6 講演

#### O2-1 日本産 *Escalerobia* 属 (ニセクビボソムシ科) の多様性

中村 涼 (東大院・農・森林動物)

ニセクビボソムシ科 Aderidae は世界から約 1200 種が知られているが、分類学的課題が未だ多く残されている。日本からは 25 種が報告されているものの (Nardi, 2020; Saitô, 2025), その中には他種のシノニムと疑われる種が複数含まれるうえ、演者が把握しているだけでも日本産既知種に該当しない種が 40 種近く存在しており、正確な多様性解明には程遠い状況である。

今回、日本産既知種の属の所属の再検討およびロンドン自然史博物館に所蔵されている

日本産種のタイプ標本の検討の結果、ホソニセクビボソムシ *Pseudanidorus rubrivespis* (Marseul, 1876)は *Escalerossia* 属に移すのが妥当であり、キバネナガニセクビボソムシ *Ariotus takedai* M. Saitô & Young, 2015 がホソニセクビボソムシのシノニムであることが明らかになった。さらに、*Escalerossia* 属に属すると考えられる未記載種が少なくとも 8 種見出された。各種は主に雄の前脚や後脚の形態の違いによって識別可能である。未記載種の多くは琉球列島に分布しており、諸島や群島をまたがった分布は確認されていないことから、本属は琉球列島で局所的に多様化した可能性がある。

## O2-2 隠岐諸島のカミキリムシ

○吉富博之（愛媛大学ミュージアム）・林 成多（ホシザキグリーン財団）・山迫淳介（農研機構植物防疫研究部門）

隠岐諸島は、島根県本土から約 50~60km 北の海上に位置し、島後と島前（西ノ島・中ノ島・知夫里島）の主要 4 島から構成されている。最高峰は大満寺山（608m）で、ブナは生育しないものの標高約 500m 以上の山地上部にはブナ帯様の冷温帶落葉広葉樹林が見られ、その下部には対馬暖流の影響を受けた照葉樹林が発達する。固有種（亜種）は少ないものの、北方系種と南方系種の両方が見られ、生物地理学的に興味深い島々である。

島根県のカミキリムシ科は、林（2011）によると 269 種が記録され、隠岐諸島からはそのうちの 159 種（林・門脇、2012, 2018）が知られる。他の分類群に比較するとよく調べられていると考えられるが、分布疑義種が含まれていたり島毎の記録が纏められていないかったり混乱も見られる。ここでは、隠岐諸島のカミキリムシ科の採集記録を再検討し報告する。

## O2-3 日本産ナガハネカクシ属における雌の形態形質

○佐藤勇哉（九大院・生資環・昆虫）・丸山宗利（九大博）

ナガハネカクシ属 *Lathrobium* Gravenhorst, 1802 は汎世界的に分布し、世界からは約 800 種、日本から 150 種が知られている。それらの判別形質には、雄の腹部第 8 腹板や交尾器の形態形質が主に用いられ、雌の形態形質はほぼ用いられていない。しかし近年、新北区のナガハネカクシ属の分類において、雌の腹部第 9 節の形態形質でいくつかの種が識別できることが示された。そこで演者は、日本産種について雌の形態形質を観察したところ、種間で顕著に異なるだけでなく、系統ごとに形態に特徴があることを発見した。この結果について、いくつかの例を紹介しながら、本属の分類における雌の形態形質の重要性について考察する。

## O2-4 ヒゲブトハネカクシ亜科のタイプ標本の検討から明らかとなった分類学的課題の事例

橋爪拓斗（九大院・生資環・昆虫）

ヒゲブトハネカクシ亜科 *Aleocharinae* は世界で約 1300 属に 17000 種近くが知られ、種多様性の高いハネカクシ科の中でも最も種数の多い亜科である。毎年多数の新種が記載され

種数は増え続けているが、一方で、同物異名であることが判明しタクソン数が減少する場合も多い。多くの同物異名が存在する理由としては、本亜科の高い種多様性のため全容を把握しにくいことに加え、過去に記載された種のタイプ標本が十分再検討されないまま新種記載が行われてきたことも一因と考えられる。演者は主にアジア産の Homalotini 族のタイプ標本を検討するためロンドン自然史博物館で約 1 週間の標本調査を行い、併せてフィールド自然史博物館収蔵の標本の借用や撮影依頼も行った。これらの調査で検討できたものは全体の一部にすぎなかったものの、同物異名を含む複数の解決すべき分類学的課題が見いだされたためその一部を紹介する。

#### O2-5 日本とミャンマーにおけるチビシュモクアリヅカムシ属（和名新称）*Euplectomorphus* の発見（ハネカクシ科アリヅカムシ亜科）

野村周平（国立科学博物館）

*Euplectomorphus* Motschulsky, 1863 はスリランカから知られるタイプ種の *E. pygmaeus* と最近 Byeon & Park (2024)により韓国から記載された *E. pygmaesimilis* の 2 種からなる小属である。本属はナガアリヅカムシ上族 Euplectitae, シュモクアリヅカムシ族 Bythinoplectini, ヒメシュモクアリヅカムシ亜族 Bythinoplectina に所属し、これまで和名がなかったので、今回「チビシュモクアリヅカムシ属」という新和名を与えた。本属は日本産の種は知られていなかったが、Ohishi (2000)により、日本に産することが公表されていた。この種 (*E. sp. 1*) は佐賀県で多数個体が採集されており、最近になって同じく佐賀県内（別地点）から複数採集された（未発表）。また、国立科学博物館とミャンマーの森林科学研究所（FRI）との共同調査の中で、ミャンマー東部から別種 (*E. sp. 1*) の一頭が採集された。日本産の *E. sp. 1* は、体長 0.8-1.2mm と小型でやや細型、ハネカクシ体型の種である。佐賀県では、湿地の落葉ふるいや衝突板トラップ（FIT）で採集されている。

#### O2-6 さあ、子どもたちと虫とり（撮り・採り）に行こう！

～自然体験の枯渇の現状からの打開をめざして～

和田 薫（明星大学）

昨今、自然へ接する機会が減少したといわれているとはいえ、博物館などで実施される昆虫展の盛況を見ると、昔と変わらず今も昆虫は十分に魅力的なものであるように見える。それを反映して、書籍の発行やテレビでの特集番組も多い。

報告者は、中学・高校の教員として理科教育に関わってきたが、学校教育においても幼少期からの自然体験が生かされ、多くの生徒や保護者を含めた大人も生き物がある程度は好きであり、触れた経験が多いと思い込んでいた。しかしながら退職後に大学に籍を移し、高尾山をフィールドとして行う SDGs プログラムとして生物多様性の認識を育成する授業を行う中で、積極的に参加できない多数の生徒の存在に気付いた。身近に観察される節足動物へのアンケートを取ると、深刻な状況が明らかになった。アンケート結果から約 6 割以上

の生徒が節足動物に生理的嫌悪感を抱き、触るのはもちろん見るのは嫌という生徒が多くいたのである。このことから生徒の自然体験は生活の中から枯渇し、経験値が急速に失われていることに気づいた。

この現状について課題を共有し、状況を変えるために実現可能な提案をしたい。

## 2日目 9:15-10:30 5講演

### O3-1 ルリクワガタ類の定量調査結果に及ぼす気象条件の影響

○浅野悟史（京大院・地球環境学）・时任美乃理（京大院・農）・前長邑佑（京大院・農）・西前 出（京大院・地球環境学）

発表者らは広葉樹の自然林に依存するルリクワガタ類を指標とした環境計測と、その結果に基づく森林施業の見直しを進めている。ルリクワガタ類の雌個体を誘引物として用いる衝突板トラップ（Female-attractive Flight Interception Trap; F-FIT）によって捕獲される雄個体数の多寡により環境の質を測り、森林生態系の影響を小さくしたり再生を早めたりする施業の工夫を模索するものである。これまでの研究から、F-FIT 近傍（約 10m 以内）の♂を誘引する効果が認められ、同一条件下で実施された実験の結果をもって環境の違いを比較することが可能である一方、気象条件等の異なる環境下で実施された実験結果との比較が難しいことがわかつってきた。そこで、ユキグニコルリクワガタ *Platycerus albicomni*, Kubota et al, 2008 を対象に、温度・湿度・照度を記録可能なロガー（TR-74Ui, ティアンドディ製）を F-FIT に付設し、♂の活性が異なると考えられるさまざまな気象条件や時間帯において、F-FIT で捕獲される個体数と気象条件の関係を推定した。また、前日からブナ新芽上で過ごしたと思われる複数の♂個体の観察に基づき、活動開始までの累積照度を算出した。これらの結果に基づき、任意の実験結果からそれぞれの環境における理想条件下での予測捕獲数を導き、環境指標としての利便性と精度を高めることができるのでないかと考えている。



### O3-2 ルリクワガタ類に対する広葉樹林業の攪乱影響：時空間スケールでの分析

○前長邑佑（京大・農・森林科学）・时任美乃理（京大院・農・森林利用）・浅野悟史（京大院・地球環境学堂・地域資源計画論）・西前 出（京大院・地球環境学堂・地域資源計画論）

持続的な森林管理のためには、生物多様性の質を的確に評価する手法の確立が求められている。先行研究では、ルリクリワガタ類を指標とし、広葉樹の植生遷移の観測や管理方法の最適化を図るために、雌個体を用いた誘引型衝突板トラップ（Female-attractive Flight interception Trap; F-FIT）による定量調査法が提案されている（淺野ほか, 2021）。そこで本研究では、岐阜県飛騨市の広葉樹林業実証試験モデル林において、2021年伐採区、2023年除伐区、未伐採区の3施業地を対象として、F-FITを用いたトウカイコルリクリワガタ *Platycerus takakuwai* Fujita, 1987 の定量調査を行い、捕獲される雄個体数を規定する森林環境要因を検討した。調査において各施業地には、互いに20m以上離れた9地点にF-FITを設置した。施業地はその連續性を考慮して配置し、林分間の空間的関係も含めた分析が可能となるように設定した。得られたデータを用いて、F-FITで捕獲された雄個体数を目的変数として、空間解析手法を行い、気温や風速などの気象条件、伐採の有無、樹冠密度や胸高直径などの森林形態の情報、施業地ごとの位置関係、林縁から各F-FITまでの距離といった空間的な位置条件などが、本種の生息地の好適性に与える影響を評価した。

### O3-3 伊豆大島のハンミョウ相

○岡本悠哉（駒大高）・海老澤慎一（駒大高）

伊豆大島のハンミョウについてはカワラハンミョウ、ニワハンミョウ、コニワハンミョウ、シロヘリハンミョウ、エリザハンミョウ、トウキヨウヒメハンミョウの6種の生息が報告されているが、過去に調査された範囲は限定的である。伊豆大島は島全体が1個の活火山であり、今後もハンミョウなど徘徊性甲虫は、その生態・分布に火山活動や植生遷移による環境変化の影響を受け続けるものと思われる。また、大島は伊豆諸島で最多の観光客が訪れる島として、観光開発の影響も無視できない。本研究では、伊豆大島一周道路周辺の裸地や崩壊地、海岸（砂浜・磯）、林道、島中央のカルデラを中心にハンミョウ成虫の分布を調査し、現時点での伊豆大島のハンミョウ相を明らかにすることを目的とした。その結果、上記6種の生息を再確認し、特にコニワハンミョウはカルデラ内で高密度で生息していることがわかった。カワラハンミョウは火山碎屑物が堆積した場所で確認されたが、過去の報告と比べると減少した可能性が示唆された。また生息地も分断されている可能性があることから、広範囲の個体数調査の実施や保全策の強化の必要性があるものと考えられた。

### O3-4 剛毛式 Chaetotaxy を用いた日本産オオキスイムシ科の幼虫形態の比較（コウチュウ目、ケシキスイムシ科）

○前野朴春（人間環境大学環境科学部フィールド生態学科）・久松定智（人間環境大学環境科学部フィールド生態学科）

日本産オオキスイムシ科3種（ヨツボシオオキスイ *Helota gemmata*, ムナビロオオキスイ *H. fulviventralis*, ミドリオオキスイ *Neohelota cereopunctata*）の幼虫について、Ashe-Watrous法を用いた剛毛式比較を行い、齢期間の変化と分類学的有用性を評価した。結果として、*Helota*

属2種では、1齢から2齢で剛毛が付加され、3齢では一次剛毛の顕著な短縮により複数部位で二次剛毛との識別が困難となる共通傾向が確認された。両種の安定した差異は前胸背板Dc3の有無に限られ、尾節D2の長さは成長に伴い変動が大きく、どちらの差異も成長過程での変異や個体差により種の特徴としては扱いにくい。一方、*Neohelota*属と*Helota*属との比較をすると、頭部Db列・V列や腹部第3節腹板Vb列の剛毛が少なく、尾節V列では剛毛が多いなど、複数部位で相違が明瞭であった。加えて、頭部を中心に剛毛基部の隆起が顕著で、2齢以降に二次剛毛が見られるようになる尾節突起は1齢から数・大きさともに発達し、*Helota*属幼虫と容易に識別できた。以上より、剛毛式は*Helota*属内の種識別には限定的だが、*Helota*・*Neohelota*属間では差異が明瞭であった。

### O3-5 マレー半島で発見された *Lycidoides* 属（ゴミムシダマシ科：ナガキマワリ亜科：ニジゴミムシダマシ族）の未記載種について

○花井真希人（九大・生資環・昆虫）・ 安藤清志（愛媛大・農・昆虫）・ 丸山宗利（九大博）

*Lycidoides*属は、ゴミムシダマシ科ナガキマワリ亜科ニジゴミムシダマシ族の一属であり、オスは非常に大きな複眼と櫛状の触角をもつ。これらの特徴は、約350属を含むニジゴミムシダマシ族の他の属には見られない、きわめて特異的なものである。また、硬化した産卵管や、頭部および前・中胸腹板の形態的特徴から、本属は *Pseudonautes* Fairmaire, 1893 と近縁である可能性が指摘されている (Ando, 2003; Masumoto & Akita, 2007)。本属はボルネオ島から5種が知られているが、発表者らはシンガポールの張隆華氏の個人コレクションを調査し、マレー半島産の本属の標本を見出した。得られた標本について詳細に形態を検討したところ、未記載種であることが判明した。本発表では、本未記載種の形態的特徴を報告とともに、これまで観察されてこなかった防御囊の形態から、本属の系統的位置について考察する。

# 総会・学会賞授与式・受賞講演

1日目 13:00～15:00（美術館3階講堂）

## 2025年度論文賞

受賞論文：AKIYAMA, H., T. NIISATA & W.-I CHOU.

Taxonomic Study of the Family Oedemeridae Latreille, 1810 (Coleoptera, Tenebrionoidea) in Taiwan. Elytra, new series, 14(2): 123–206.

功労賞：露木繁雄会員

ポスター発表（美術館第2会議室B）

2日目 10:30～12:00 ポスター発表コアタイム  
11題

### P-1 関門海峡は地下浅層性チビゴミムシにとって大きな障壁ではない

○芦田 久（近畿大学生物理工学部）・稻畠憲昭（京都市）

ナガチビゴミムシ (*Trechiama*) 属は、有眼種から複眼が痕跡となった盲目種までを含み、北海道から九州北部にかけて広く分布し、台湾、朝鮮半島、ロシアからも少数の種類が記載されている。日本産は約 170 種が知られ、11 種群に分類されている。日本国内の分布の西端付近では、福岡県北九州市の足立山からナカオメクラチビゴミムシ種群を構成する唯一の種であるナカオメクラチビゴミムシ *T. nakaoi* Uéno, 1972 が、山口県秋吉台の鍾乳洞からオオメクラチビゴミムシ種群を構成する唯一の種であるオオメクラチビゴミムシ *T. pluto* Uéno, 1958 が、それぞれ記載されている。今回第2著者により、この2ヶ所の中間地点となる山口県下関市の地下浅層から本属の新たな個体群が発見された。詳細に検討した結果、この個体群は、体型やオス交尾器の類似性からナカオメクラチビゴミムシ種群に属するが、上翅の剛毛式やオス交尾器形態に明瞭な差異があるため未記載種であると判断した。今回の発見により、ナガチビゴミムシ属の種分化に関しては、関門海峡よりも大きな障壁が厚狭川あたりに存在することが示唆された。

### P-2 オオツノハネカクシの形態における性的二型性および同性内多型性に関する研究

○松村健太郎（東大院・総合文化）・竹内成太（香川大院・農）

いくつかの甲虫種では、雌との交尾を巡り雄同士が闘争を行う。この同性内性選択は雄の発達した武器形質を進化させる。その一方で、雄の武器サイズにはしばしば種内多型が確認

され、これは雄の交尾における代替戦術の存在を予想させる。例えば、メジャー雄は積極的に闘争を行うが、マイナー雄は分散やスニーキングを行うことがいくつかの甲虫種で知られている。オオツノハネカクシは、塩田に生息する甲虫目ハネカクシ科の昆虫である。本種の特徴としては、雄に前頭部に1対の、前胸背板に1本の角を持つ。オオツノハネカクシの成虫は、塩田にて坑道を作ることが知られており、本種の雄は坑道内にて雌と交尾をし、ライバル雄を坑道内にて、その武器形質を用いて排除している可能性が考えられる。しかしながら、本種の詳細な交尾様式については不明なままである。また、本種の雄が持つ武器形質に多型が見られるのかどうかも不明なままである。そこで、本研究では、オオツノハネカクシの塩田における交尾様式や、雄の武器サイズに多型が見られるのかどうかを検証した。

#### P-3 徳島県のコガタノゲンゴロウ (*Cybister tripunctatus lateralis*) を絶滅の危機から救え！

○中倉響希（徳島科学技術高）・○立石伶菜（徳島科学技術高）

本研究は、コガタノゲンゴロウ (*Cybister tripunctatus lateralis*) が徳島県の環境下で生息域を拡大することができるかを検討するために、水草の種類による産卵数を調査した。本実験では、基質植物としてアギナシ、コナギ、ホザキノフサモ、アナカリスを用意した。50 cm水槽に対象とする4種の基質植物とコガタノゲンゴロウを入れ1か月間飼育し、産卵しやすい条件を調査した。

仮説として、基質植物の茎が固く、中が詰まっているものは産卵しにくいと考えた。

結果として、抽水植物であるアギナシへの産卵数が最も多く、ホザキノフサモやアナカリスなどの沈水植物への産卵が少なかった。

これらの結果から、アギナシへの産卵数が最も多かったのは、茎が固く太いため、産卵時に楽な姿勢をとれたからではないかと考えた。また、コガタノゲンゴロウの産卵時期は徳島県での生息地においてアギナシとコナギが非常に多く存在している。そのため、徳島県でのコガタノゲンゴロウの生息域の拡大は可能であるのではないかと考えられた。

#### P-4 河岸域における地表徘徊性甲虫の分布特性と水面離陸行動との関連性

○橋本晃生（杏林・DSセ）・伊藤慎（杏林大・保健）・西田豊（杏林大・DSセ）・吉田清隆（杏林大・DSセ）

河岸域に棲む陸生甲虫には、水にさらされた際に水面から離陸できる種があり、種によってその離陸率や離陸に要する時間が異なる。この水面離陸行動は、水位変動や水辺の天敵による捕食の回避に機能すると考えられることから、川の流れの近くに分布する種ほどその能力は高いと予想される。そこで、東京都多摩川下流域の氾濫原において、水際線からの距離に応じて設置したトランセクト上のコドラートにより甲虫の分布を調査した。得られた距離情報、性別、および体サイズを説明変数として、室内実験下における水面離陸に要する時間を目的変数としたCox比例ハザードモデルを構築した。その結果、離陸までの時間は、水際からの距離と体サイズに影響を受けることがわかった。特に、水際近くに分布する小型

の甲虫ほど速やかに離陸する傾向があり、水面離陸行動は河岸環境への適応である可能性が示唆された。

#### P-5 甲虫における分布境界線はどこか

##### ～ブラキストン線から石狩低地帯までの植生と分布の検証

○本間隆太（酪農学園大大学院・酪農学専攻）・松林 圭（酪農学園大・環境共生学類）

生物の分布の範囲は、その種が持つ生理的条件や地理的条件などの様々な条件の下で決定される。生物の分布境界線としては、哺乳類や爬虫類などでブラキストン線や八田線などが知られているが、昆虫の北限については共通する明瞭な境界線はわかっていない。一方で甲虫の多くが生息場所や餌資源として植物と密接な関係を築いているため、一部の甲虫類においては植物の分布が分布境界線に影響を与えていたり可能性が高い。本研究では地理的な境界線である津軽海峡（ブラキストン線）から、北海道南部地域を経由して石狩低地帯にかけての広い範囲の計14地点でUVライトを用いたBOXライトトラップとピットフォールトラップを設置し、甲虫相と樹種を比較した。この結果から、分布境界に与える海峡と植生の影響を評価し、何が分布を決める要因になっているかをグループごとに検出する。

#### P-6 ウンモンナガタマムシ（タマムシ科ナガタマムシ属）の再発見と生態的知見

○山田 航（厚木市）・佐伯智哉（横浜市）

ウンモンナガタマムシ *Agrilus undulatipennis* Kurosawa, 1976 は屋久島産の個体を基に記載され、国内では屋久島・奄美大島、国外では台湾に分布する (Kurosawa, 1976; 大桃・福富, 2013)。本種は体長 6.0 - 9.1 mm と日本産種では中～大型のナガタマムシで、上翅には銀白色短毛からなる雲状紋を現す (Kurosawa, 1976; 大桃・福富, 2013)。種小名および和名の由来となっている。本種の採集記録は原記載を含めて数例のみでありいずれも採集状況は不明である。また、幼虫および成虫の寄主植物も知られていないため、さながら幻の種と化している。屋久島におけるタマムシ科甲虫は約 50 種が知られているものの、今日における本種の生態情報の乏しさが示すように十分な調査が行われてきたとは言い難く、更なる調査が求められている。

演者らは本種の再発見と生態を解明すべく、2023～2025 年にかけて屋久島での野外調査を実施した。その結果、実に 39 年ぶりに本種が再発見され、材採集や成虫の飼育観察により幼虫及び成虫の寄主植物が解明された。本発表では、今までに判明した本種の生態的知見および再発見に繋がった調査アプローチについて紹介する。

#### P-7 オオキバミイロカッコウムシの生態とナガシンクイムシ科の数種について

○武田雅生（岡山県）・○武田寛生（岡山県）

オオキバミイロカッコウムシ *Elasmocylidrus takedaorum* は岡山県岡山市から記載された種である。岡山県赤磐市、兵庫県相生市に加えて、韓国（北部・中部）、中国（安徽省）を

含む分布が知られる。演者らは、成虫を採集し、野外および飼育下で行動を観察した。成虫は4月から5月にかけて出現し、昼行性で活発に歩行・飛翔する。成虫の捕食対象はクロヒメナガシンクイ *Xylopsocus bicuspis* やカキノフタゲナガシンクイ *Sinoxylon japonicum* が知られ、飼育下で捕食が確認された。伐採地の枯れ枝のほかに照葉樹林や里山林の新しい枯れ枝（高所も含む）が生息環境であると推測される。このため、早春にナガシンクイ類の発生した伐採枝やその周辺の飛翔個体を狙った採集法が有効である。オオキバに加えて、捕食対象となるナガシンクイ類についても記録は局地的であり、特に本州と四国のクロヒメナガシンクイの記録は少なく、各地で正確な同定に基づいた記録の集積の必要である。

#### P-8 テラニシオナガミズスマシの分類学的再検討

○柳沼嘉偉斗（九大院・地社）・北野忠（東海大・教養）・苅部治紀（神奈川県博）・荒谷邦雄（九大院・比文）

テラニシオナガミズスマシ *Orectochilus teranishii* Kamiya, 1933 (以下、テラニシ) は、コウチュウ目ミズスマシ科に属する水生昆虫であり、「東京近郊玉川」をタイプ産地として記載された。本種は記載以降再発見されず、タイプ標本はすべて第二次世界大戦により焼失したとされている。

近年、三宅（2024）によって本種が再発見され、その形態的特徴も報告された。しかし、原記載と矛盾する点がある上に、近縁種ツマキレオナガミズスマシ *O. agilis* Sharp, 1884 (以下、ツマキレ)との識別も不明瞭であったことから、分類学的再検討が必要と考えられた。

そこで、本研究では、三宅（2024）が記述した形態的特徴（上翅会合部先端の形状および雄交尾器）に基づき同定したテラニシと、ツマキレを含む日本産オナガミズスマシ属について分子系統解析 (mtDNA CO I 領域・nDNA AK 領域) を行うとともに、テラニシとツマキレの形態についても詳細に比較した。

結果、両種の遺伝的距離は小さいものの、それぞれが明確なクレードを形成した。また、形態比較では、上翅会合部先端の位置や雄交尾器中央片の形態などに安定した明瞭な差異が確認された。以上の点から、テラニシをツマキレとは異なる別種として扱う従来の分類が妥当であることが示唆された。

#### P-9 顕在化する急激な温暖化、乾燥化が甲虫に与える影響

苅部治紀（神奈川県博）・河合秀樹（神奈川昆虫談話会）・○高橋和弘（平塚市）・加賀玲子（神奈川県博）・渡部哲史（九大院）

気候変動の中でも、毎年のように過去最高が更新される近年の異常高温と夏季の干ばつは、甲虫にも大きな影響を与えているものと考えられる。演者らは気候変動が主要因と推察される甲虫への深刻な影響に注目しており、把握できた事例を紹介する。

水生昆虫は、生息環境が局在するため、気候変動の影響を受けやすいグループと考えられる。過去の大きな干ばつとして、与那国島を襲った2014年の大干ばつ（ヒメフチトリゲン

ゴロウの生息池が完全に干上がり絶滅)を嚆矢として、その後も干ばつ影響に注目してきたが、ここでは、サロベツ原野の2022年の大干ばつ、本年度の南関東の干ばつなどの影響事例を紹介する。

面積の小さい島への影響も危惧され、対馬で進行している温暖化影響を俯瞰する。夏場の極端な高温乾燥は水域以外に山域でも林床の極端な乾燥化をもたらし、近年記録がないとされるミスジヒメハナもその事例の可能性がある。

また、神奈川県レッドリストの改訂で詳細な調査が行われた丹沢山地では、過去に多数が確認されているヨコモンヒメハナカミキリなどのヒメハナカミキリ類やジョウカイボン類など複数種が絶滅した可能性があり、すでに各地で影響が顕在化している可能性が高い。

#### P-10 防災重点ため池廃止が水生甲虫に及ぼす影響

西原昇吾（中大・理工）

農業用ため池は多面的な機能をもち、水生生物のレフュージアとしてきわめて重要な役割を果たしている。しかし、2019年以降、全国で6万以上が防災重点農業用ため池に選定され、2030年を期限とする特別措置法により各地で管理が求められており、改廃が進んでいる。

石川県内の2019～2024年に防災工事が実施された池や管理放棄された池のうち、完全に水位を下げた池では水生昆虫の種数は大幅に減少し、チビゲンゴロウやゴマフガムシなど、水田と同様の生物相であった。一方、50cm～1mほどの水深が残された池では、水生昆虫の種数は減少したもの、堤体付近に残存する水域で生物相が回復し、ゲンゴロウも確認された。それに加え、浅い部分が湿地となり湿生植物が繁茂した池もあった。水位低下に対する反応は種によって異なり、絶滅危惧Ⅰ類のシャープゲンゴロウモドキが残存する池もあったが、ため池に依存するマルコガタノゲンゴロウは確認されなくなった。

以上より、今後の農業用ため池の防災工事において、50cm～1m以上の水深を保ち、水位の調節が可能な池として残すことが重要である。あわせて、池の浅い部分の水生植物が再生した湿地では、定期的な攪乱などの維持管理による遷移の防止がのぞまれる。

#### P-11 甲虫学者大林一夫氏から黒田祐一氏に宛てられた書簡

奥島雄一（倉敷市立自然史博物館）・岡本泰典（岡山市）

倉敷市立自然史博物館は2018年3月にカミキリムシの研究者として知られた黒田祐一博士（1924–2014）のご遺族より、同氏収集のカミキリムシを中心とした昆虫標本コレクション及び蔵書・研究資料等の遺品の寄贈を受けた。黒田氏は岡山市で内科の開業医を営む傍ら、カミキリムシ、特に幼虫・蛹の解明に取り組んだ。遺品の中には生前に交流のあった昆虫研究者らから送られた手紙や別刷り等も含まれている。日本を代表する甲虫研究者のひとりとして知られる大林一夫氏（1915–1967）とは特に親しかったようで、同氏からの1945年9月から1966年2月までに出された封書及び葉書計63通が発見された。

差出人の大林一夫氏は新聞記者（毎日新聞社）を本職とする一方、カミキリムシを中心とした甲虫類研究者で多くの後継研究者を育てたことでも知られる。戦後、中根猛彦博士や林 匡夫博士らとともに雑誌『昆虫学評論』を立ち上げ、現在の日本甲虫学会のルーツのひとつを築いた。

太平洋戦争末期にそれぞれ岡山空襲（1945年6月29日）と岐阜空襲（同年7月9日）により命々生き延びた黒田氏と大林氏が多くの標本財産を失うも終戦直後から再起を図る様子が伺える資料である。

## シンポジウム（美術館3階講堂）

### 2日目 13:00～15:00 4講演

#### S-1 目録は「いきて」いる 一趣旨説明にかえて—

千田喜博（庄原市立比和自然科学博物館）

ある地域から記録された生物種のリストである目録は、生物多様性を理解するための根幹となるものである。生物多様性を解き明かす学問である分類学において、目録は基盤となるものの一つである。また、地方ファウナの解明を始めとした生物地理学的な領域においても、重要な情報を提供する。他にも、生物多様性の保全でも、「そこにどのような生物がいるか？」を把握することは重要である。

本講演では、どのような研究をもとに目録を作成し（=生み出す）、最新に維持し続け（=生かす）、あるいは活用（=活かす）が為されているのか、筆者の経験を基に概説し、シンポジウムのイントロダクションとしたい。

#### S-2 「日本列島の甲虫全種目録」の愉しみ方

鈴木 茂（岡山市）

1984年から1986年にかけて保育社から原色日本甲虫図鑑 全4巻が出版された。その3年後、1989年に九州大学農学部昆虫学教室から日本産昆虫総目録が出版され、それまでに国内から記録された甲虫の目録がまとめられた。そしてその後約30年間にわたって、この2冊は研究者と甲虫を趣味とする人たちのバイブルであり続けた。しかし、その後一部の分類群に関する図鑑や解説書は出版されたが、日本の甲虫目全体を取り扱った図鑑や出版物を見ることはできていない。演者は虫寿（64歳）の記念として日本産甲虫の全種を科ごとにまとめ、2017年5月に「日本列島の甲虫全種目録」としてウェブサイトに掲載し、その後毎年、改定を繰り返してきた。本講演では、「日本列島の甲虫全種目録」の作成過程、維持管理、そして問題点について述べる。

### S-3 甲虫界のこれまでとこれから

吉富博之（愛媛大・農・環境昆虫）

インベントリー調査には目録が欠かせない。しかし、電子ジャーナルの台頭や発表媒体の多様化などにより、新種の記載や新記録、分類体系の改訂を追跡することが難しくなり、最新の情報を反映した目録の作成は困難になりつつある。本講演では、「月刊むし」誌に毎年掲載されている「甲虫界」を基盤として、これまでの動向を振り返り、今後の甲虫界の行方を展望したい。

### S-4 香川県での甲虫相調査 一地域ファウナ屋の視点から目録作成を考える一

藤本博文（瀬戸内むしの会）

筆者は目録作りを「地域の生物多様性の現状を把握するにあたって最も基本的な作業」（鷺谷・矢原, 1996）と考え、香川県産甲虫目録作成を目標に記録の収集を継続している。2025年9月現在、香川県から2500種あまりの甲虫が記録されているのを確認している。地元の昆虫同好会である瀬戸内むしの会の会誌「へりぐろ」には、県産甲虫全体の約3/4にあたる1878種が報告されており、継続的な会誌発行が地域甲虫相解明に一定の役割を果たしていることが分かる。

近年はインターネット上に様々な目録が公表されており、各種生物相の調査精度向上に貢献しているものと思われる。「日本列島の甲虫全種目録」もこうした目録の一つだが、2022年からは中四国各県の分布図が掲載されるようになったことで、記録状況が可視化され、より調査に活用しやすくなった。演者はこのWebページの恩恵を受けている一人であり、その有用性について話題提供を行いたい。

発表後半では、分布表の活用事例として、演者が現在特に力を入れて取り組んでいる香川県島嶼部での甲虫相調査について紹介する。

今後は、香川県産甲虫目録や島嶼別分布表を公表し、知見を共有できるようにすることが目標となる。

## 分科会 2日目 15:15～16:45

### ○カミキリ分科会（司会人：山迫淳介）

#### D-1 「日本のヒメハナカミキリ」 最新の分類体系の紹介と今後の研究課題

斉藤秀生（千葉県習志野市）

*Pidonia* ヒメハナカミキリは最も人気のある甲虫のひとつであるカミキリムシ科に含まれるハナカミキリの一群である。かつては種の分類が難解であることから、カミキリムシの愛好家からも長く敬遠されていたが、近年は各図鑑や各県でとりまとめられているカミキリムシの資料などでも比較的詳しく解説されるようになり、愛好者も増えてきている。そのよ

うな中、昨年この群の集大成ともいえる図鑑が出版され、これまでの分類体系の再検討を含め新知見が多く発表された。本講演では、この新書「日本のヒメハナカミキリ（窪木, 2024）」でまとめられた最新の分類体系を紹介するとともに今後の研究課題について発表する。

#### D-2 セスジヒメハナカミキリ種群とフタオビヒメハナカミキリ類について

原田惇作（東京都）

ヒメハナカミキリ類の雄交尾器内袋の形態は、近縁種間の分類にも有用であることが知られている（Kuboki, 2014; 2015）が、主な分類形質である上翅斑紋と比べて種内や亜種間での比較は十分でない。本講演では、窪木（2024）により亜種の記載や新たな亜種分布域が認められたセスジヒメハナカミキリ種群およびフタオビヒメハナカミキリ類について、雄交尾器内袋の詳細な観察を含む形態比較を行った結果を報告する。

#### ○ゾウムシ分科会（世話人：的場 績）

#### D-4 枯れ木以外を利用するキクイゾウムシ亜科の多様性

井上修吾（九大）

#### JWIN（日本ゾウムシ情報ネットワーク）の総会

#### ○ハネカクシ分科会（世話人：野村周平）

#### D-5 九州産ヒメミズギワヨツメハネカクシ属 *Lesteva* (ハネカクシ科:ヨツメハネカクシ亜科) の分類

○奥村哲偉（九大・農・昆虫）、丸山宗利（九大博）

ヒメミズギワヨツメハネカクシ属 *Lesteva* はヨツメハネカクシ亜科に属するハネカクシの一群で、日本では比較的冷涼な地域を中心に分布する小型種からなる。また、初春から初夏、および秋に川沿いにある濡れた落葉から得られることが知られている。日本からは 19 種の記録があり、そのうち島嶼を含む九州地域からは 6 種が記録されている。しかし、九州で本属のまとめた記録があるのは宮崎県のみであり、その他の記録は散発的なものにと

どまる。このように、九州内での調査は十分ではなく、本属の種多様性の解明は不十分である。また、Watanabe(1990)による日本産ヨツメハネカクシ亜科の再検討では、種同定に重要な形質である前胸背板や鞘翅の点刻、雄交尾器内袋などが図示されておらず、種間の同定に困難が生じている。演者らは主に九州で採集された標本に基づき、外観と雄交尾器を比較することで、分類学的検討を行った。その結果、九州地域未記録種 3 種と未記載種 1 種が見出された。

#### D-6 サスライアリと共生する好蟻性ハネカクシ *Dorylophilina* 亜族の多様性

○松木佑太（九大院・生資環・昆虫）・丸山宗利（九大博）・野崎 翼（九大院・生資環・昆虫）

*Dorylophilina* 亜族はハネカクシ科ヒゲブトハネカクシ亜科 *Mimanommatini* 族に属する一亜族で現在 28 属 169 種が知られている。本亜族はアフリカを中心とした旧世界の熱帯域に生息し、サスライアリ属 *Dorylus* のアリと、ごく一部がシロアリと共生する。2022 年および 2023 年に九州大学の研究チームがアフリカ西部カメルーンにて採集調査を行っており、そこで得られた多数の標本を検討した。その結果、1 つの寄主アリのコロニーから、複数属にまたがる多種の互いに近縁な *Dorylophilina* 亜族ハネカクシが確認され、その種多様性は顕著であった。しかしながら、ほとんどの種はこれまで標本の鮮明な全形図が文献上で示されたことがなく、また雌雄一方でのみ記載が行われている種が存在するなど、分類に必要な形態情報が不足している。本講演では多数の標本の検討と先行研究の知見を踏まえて現在までに判明していること、および今後の課題について報告する。

#### D-7 佐賀県における西田光康氏の FIT によるハネカクシ採集

野村周平（国立科学博物館）

佐賀県武雄市在住の西田光康氏は、2021 年度から 2 種（据置式、吊下式）の衝突板トラップ（FIT）を用いた甲虫採集を実施し、2021 年、2022 年それぞれに多大な成果を得ることができた。2021 年度は、佐賀県太良町帆柱岳（標高 600m）と同町田古里川（標高約 100m）の 2 か所に 2 種の FIT を設置し、4～8 月に合計 17 回の回収を行った。その結果、多数の佐賀県初記録種を含む、アリヅカムシ 34 種、コケムシ 12 種を採集した。2022 年度は、帆柱岳の 1 か所に絞り、2 種の FIT をそれぞれ区別して、3 月～8 月に合計 18 回の回収を行った。その結果、多数の佐賀県初記録種を含む、アリヅカムシ 44 種、コケムシ 19 種、ムクゲキノコムシ 15 種を採集した。中に日本初記録種のデルスウザーラホソムクゲキノコムシ（体長 0.6mm）が含まれていた。以上の成果のうちムクゲキノコムシとコケムシの一部はさやばねニュースシリーズ誌に、他の成果は久留米昆虫同好会誌 KORASANA に掲載もしくは投稿中である。

## ○ゴミムシ分科会（世話人：内田脩太）

### D-8 中部山岳地帯におけるゴミムシ相の解明（予報）

内田脩太（NPO 行徳自然ほごくらぶ）

本州中部に位置する中部山岳地帯（日本アルプス）は、3つの山脈から構成され、標高 3,000m 級の山々が連なる複雑な地形を呈する。そのため北方系の生物が依存的に分布したり、多くの固有種が棲息するなど、世界的にも特異な生物相が形成されている。しかし近年、地球温暖化に伴う気候変動や森林限界の上昇、シカの採食圧による植生の劣化などにより、山岳域の環境は急速に変化しつつある。このような背景から、生態系の保全および環境変動の評価には、生物相の把握が重要な課題となっている。

演者は中部山岳地帯において、主に亜高山帯から高山帯を対象としたゴミムシ相の調査を実施している。調査は一般登山道上での夜間の見つけ採りにより行い、環境への影響を最小限に抑えるよう配慮した。本発表では今年度に実施した中央アルプス木曽駒ヶ岳周辺および南アルプス光岳周辺での調査を中心に経過を報告する。なお国立公園特別保護地区での採集調査については、環境省および森林管理署の許可を得て実施した。

## ○水生甲虫分科会（世話人：吉富博之・林 成多）

### D-9 ダルマガムシやヒメドロムシの形態観察方法

林 成多（ホシザキグリーン財団）

微小な水生甲虫であるダルマガムシやヒメドロムシは同定にあたって、複雑な構造の交尾器や内袋を観察する必要がある。演者は近年、これらの甲虫類の記載を行っており、幼虫も含めて形態の観察方法について紹介する。

### D-10 島根県におけるセマルヒメドロムシ成虫の季節動態および幼虫の発育期間

○森本涼介（島根県中山間 C）・宮永龍一（島根大・生物資源）

ヒメドロムシ科は主に河川の礫質や流木、植物根の間隙などに生息する微小な水生甲虫で、日本から 18 属 63 種が記録されている。本科は、近年も継続して未記載種が新種として記載されているほか、分子系統解析にもとづき従来の分類体系が再評価されるなど分類学的研究は進展しているが、生態については不明な点が多い。演者は生活史の解明を目的として、島根県意宇川において本科の 1 種であるセマルヒメドロムシ *Orientelmis parvula* を対象に 2019 年から 2021 年にかけて野外調査や解剖実験を行った。調査の結果、成虫および幼虫は通年で確認されること、幼虫齢期は 6 歳であり、1 歳幼虫は 7~10 月に確認され、終齢幼虫は 4~5 月に増加すること、成虫は 6~9 月に完成卵をもつこと、越冬態は幼虫と成虫であることを第 81 回日本昆虫学会大会で報告した。しかしながら、この調査ではいくつかの生活史形質を明らかにできず、生活史の推定には至らなかった。そこで、さらなる野外調査と室内実験を行った。本講演では、追加の研究で得られた知見から本種成虫の季節動態、幼虫の発育期間、推定される生活史について報告する。

## D-11 日本産水生ガムシ科のDNAバーコード領域の解析

蓑島悠介（北九州市立自然史・歴史博物館）

ガムシ科は水生種と陸生種の両方が含まれるグループで、そのうち水生種は80種ほどが日本から知られている。本科は、陸生種で分類学的課題を残すものの、水生種に関しては一部のグループを除き種分類に一定の終わりが見えつつある状況にある。その一方で、種内・種間における遺伝的変異については明らかではないところも多く、またDNAバーコードのライブラリも充実しているとは言えない。本講演では、演者が近年行った水生ガムシ科のDNAバーコード領域の解析結果について紹介する。

### ○雑甲虫分科会（世話人：中村涼）

## D-12 日本産アオジョウカイ属 *Themus*（甲虫目ジョウカイボン科）の分類学的再検討

中村 涼（東大・農）・久保田耕平（平成国際大・法）

アオジョウカイ属 *Themus* は約 250 種が知られるアジア固有のジョウカイボン亜科の一属で、大型で色彩豊かな種が多い。日本では、北海道から八重山諸島にかけて本属の種が広く分布し、属の基準種であるアオジョウカイ *T. cyanipennis* Motschulsky を含む 10 種 3 亜種が知られている。本研究では、Satô & Ishida (1982) 以来となる日本産本属の包括的な分類学的再検討を行った。タイプ標本を含む多数の材料をもとに、各種・亜種の分布と判別形質を整理した結果、日本産本属は 9 種 2 亜種に整理するのが妥当と考えられた。特に、四国産のアオジョウカイとされていた個体群がこの種とは異なる別種であること、長崎から記載されたキンイロジョウカイ *T. episcopalalis* Kiesenwetter は長崎には分布せず、本種の担名タイプ標本は本州産の特徴を示すことなど、よく知られた種についても新知見が明らかとなった。ミトコンドリア遺伝子に基づく全種を網羅した分子系統解析の結果は、形態による分類の結果を概ね支持したが、同所的に生息する近縁な 2 種間で明瞭な遺伝的分化が見られず、両種間で遺伝子浸透が生じていると考えられる事例も確認された。系統解析の結果からは、本属の日本列島への侵入過程に示唆を与える知見も得られた。

## D-13 オイケクビボソジョウカイの系統と襲速紀要素分布について

高橋和弘（神奈川県）

オイケクビボソジョウカイは *Asiopodabrus* 属の中の希少種で、原記載では 1♂のみで記載されている。その後、未発表ではあるが静岡県と山梨県の県境にある伝付峠で追加個体が得られている。本種が属する *ohbayashii* group は、本種とオオバヤシクビボソジョウカイの 2 種から構成されている。これは、この 2 種の交尾器の構造が類似していることから推定されたものもあるが、オオバヤシは四国、オイケは南アルプスとその分布域が大きく離れており、両種が本当に類縁関係にあるのかについての証明が求められている。そこで、現在 DNA による *Asiopodabrus* 属の系統解析を進めておられる東大の中村氏に検討してもらおうという理由で、サンプルを得るために調査をここ数年継続してきた。一般的な傾向として

*Asiopodabrus* 属は、環境が良好であれば個体数は多く、簡単に採集できるイメージがあるが、本当に必要な希少種を採集するにはかなり困難を伴う場合が多々ある。演者は本年、ついにオイケクビボソジョウカイを採集することができたので、その苦労話と生息環境のヒントなどについてお話しするとともに、本種が含まれる可能性のある襲速紀要素分布をするジョウカイボンについても併せてお話ししたい。

#### D-14 ナガムクゲキスイの正体

田村竜土（愛媛大学）

ムクゲキスイ属 *Biphyllus* Dejean, 1821 はムクゲキスイ科最大の属であり、世界から 89 種が知られている。日本からは 16 種の既知種が知られており、他の地域と比較すると分類学的研究は比較的進んでいるといえる。しかし、平野（2010）は複数の未同定種を和名先行で報告しており、これらの種の存在は日本産ムクゲキスイ属が抱える分類学的課題の一つとなっている。ナガムクゲキスイは平野（2010）が和名先行で報告した未同定種の一つであり、西日本を中心に各地から分布記録が報告されている。

演者は現在日本産ムクゲキスイ属の分類学的研究を行っているため、その成果の一部として、本発表ではナガムクゲキスイの正体およびその形態的特徴について報告する。

#### 大会参加者名簿

（2025 年 11 月 10 日現在；五十音順、○は懇親会参加者）

あ

相本	篤志	山口県	
青井	光太郎	都立大院・理・動物系統	○
青木	哲郎	岐阜県	○
秋山	美文	広島県神石郡神石高原町	
浅野	悟史	京都府	
芦田	久	近畿大学	○
安達	由莉	倉敷市	
荒木	雄吾	愛知県名古屋市	
荒谷	邦雄	福岡	○
安藤	清志	愛媛大学農学部	○

い

池尾	僚太	島根県	○
伊澤	和義	多治見市	○
伊東	善之	高知市	○

伊藤	建夫	京都府	○
稻畑	憲昭	京都府	
井上	修吾	九州大学大学院 生物資源環境科学府 昆虫学研究室	○
井上	晶次	名古屋市	○
井原	翼	愛媛県	
岩田	隆太郎	東京都町田市	○
岩竹	優希	愛知県	
う			
植村	優人	愛媛大学	
内海	幸弘	千葉県立中央博物館	
内田	脩太	NPO 行徳自然ほぐらぶ	○
え			
江木	寿男	岡山県在住	○
浴井	栄	山口県周南市	
海老澤	慎一	駒澤大学高等学校	
お			
大木	裕	横浜市	○
大林	延夫	神奈川県	○
大山	高宏	岡山県	
大山	望実	岡山県	
岡	杏花	広島県	○
岡野	貴司	岡山県倉敷市	
岡野	良祐	大阪府守口市	○
岡本	悠哉	駒澤大学高等学校	○
岡本	伸子	東京都北区	
岡本	忠	倉敷昆虫同好会	
荻野	高宏	京田辺市	○
奥島	雄一	倉敷市立自然史博物館	○
奥田	好秀	宝塚市	○
奥村	哲偲	福岡県福岡市	○
尾崎	一天	大阪府	
小澤	宗右	愛媛大学	
大生	唯統	鳥取市	○

大原	昌宏	北海道大学総合博物館	○
か			
柿添	翔太郎	国立科学博物館	
片岡	美貴	徳島県立徳島科学技術高等学校 教諭	
片山	禄弘	倉敷市	
蟹江	昇	愛知県	○
金子	道夫	つくば市	○
金子	直樹	一般財団法人 自然環境研究センター	○
神尾	大地	東京理科大学	○
上手	雄貴	名古屋市衛生研究所	○
河上	康子	大阪市立自然史博物館 外来研究員	
川瀬	英夫	石川県	○
神澤	由己	東京都	
神田	雅治	和歌山県立自然博物館	
き			
木野田	毅	宮崎県	○
く			
久保田	耕平	平成国際大学	○
久米	加寿徳	香川県高松市	○
黒木	大司	倉敷市 むしむし探検隊	
こ			
児玉	敦也	福井県敦賀市	
ご			
五井野	響太郎	九大院・生資環	
さ			
齋藤	翔夢	岡山理科大学 進化動物研究室	
斎藤	明子	千葉県	○
斎藤	秀生	千葉県	○
齋藤	壯志	倉敷市 むしむし探検隊	
佐伯	智哉	いであ株式会社	○

作元	久輔	岡山県倉敷市	
佐藤	隆志	青森県	○
佐藤	諒和	愛媛大学	
佐藤	勇哉	九大院・生資環・昆虫	○
里見	太輔	兵庫県	○
し			
重藤	裕彬	北大・昆虫体系	○
清水	東与	大阪府	○
下野	誠之	環境科学大阪株式会社	
初宿	成彦	滋賀県大津市	
す			
末長	晴輝	岡山県倉敷市市民税課	○
鈴木	栄二	愛知県	
鈴木	茂	岡山県岡山市	
鈴木	光太郎	神奈川横浜市緑区	
須磨	隆成	釧路公立大学経済学部経営学科 北海道釧路市	
せ			
関	峻大	九大院・生資環・昆虫	
瀬島	勇飛	東京都立大学	○
千田	喜博	倉敷市	○
た			
高井	泰	岐阜県	○
高橋	和弘	平塚市	○
武田	寛生	岡山県	
武田	雅生	岡山県	
立石	伶菜	徳島県立徳島科学技術高等学校 高校2年	
田邊	伊吹己	倉敷市 むしむし探検隊	
瑠寺	裕	京都府立大学	○
田村	竜土	愛媛大学	
つ			
柘植	葵	東京農業大学 生物資源開発学科	

堤内	雄二	大分県	○
鶴	智之	鳥取県立博物館	
で			
出嶋	利明	香川県	○
と			
時任	美乃理	京都大学	
徳田	展成	倉敷市	
戸田	尚希	名古屋市	○
富永	凌生	岡山理科大学 理工学研究科	○
友田	壮祐	帯広畜産大学	○
な			
中川	安由	高知高専	
中倉	響希	徳島県立徳島科学技術高等学校 高校2年	
中島	淳	福岡県保健環境研究所	○
中田	勝之	石川県白山自然保護センター	○
中西	正憲	岡山県倉敷市	
中野	一成	岡山県岡山市	○
中林	博之	新潟県	
中村	涼	東大院	○
中村	連	東京都	○
生川	展行	三重県	
に			
新里	達也	東京都	○
錦織	龍生	愛媛大学	
西田	光康	佐賀県	○
西原	昇吾	中央大学理工学部	○
西脇	怜央	京都府	
の			
野津	祐子	倉敷市	
野村	周平	国立科学博物館	○

は

芳賀	馨	埼玉県	
橋爪	拓斗	九大院・生資環・昆虫	○
橋本	晃生	杏林大学データサイエンス教育研究センター	○
長谷川	道明	豊橋市自然史博物館	○
秦	英夫	岡山県赤磐市	○
秦	健翔	岡山理科大学附属高等学校	○
花井	真希人	九大・生資環	
濱口	直翔	東京都立大学	○
林	紗南美	兵庫県	○
林	大智	岡山理科大学生物地球学部生物地球学科	
林	成多	ホシザキグリーン財団	○
原田	惇作	東京都	○

ひ

久松	定智	愛知県岡崎市	○
平井	幸成	東農大・院・昆虫	○
平木	寿一	広島県	

ふ

藤本	博文	瀬戸内むしの会	○
----	----	---------	---

ほ

保坂	恭吾	東京農業大学昆虫学研究室	
細川	浩司	愛知県	○
細谷	忠嗣	日本大学	○
堀内	一樹	東京農大・昆虫	○
堀川	直樹	愛媛県	
本間	隆太	北海道	○

ま

前長	邑佑	京都府
前野	圭子	愛知県
前野	響子	名古屋市
前野	朴春	人間環境大学
曲田	清彦	佐賀県

松木	佑太	九大院・生資環・昆虫	○
松原	豊	神奈川県	
松村	雅史	沖縄県	○
松村	健太郎	東京大学大学院総合文化研究科	
松本	光平	北九州市	○
的場	績	和歌山県	○
 み			
三木	巴月	兵庫県立大学 大学院 環境人間学研究科	○
光枝	洋	倉敷市	
蓑島	悠介	北九州市立自然史・歴史博物館	○
三宅	武	大分県	○
宮本	悠希	岡山県立総社高等学校	
 む			
村上	広将	愛媛県	
 も			
森	正人	兵庫県西宮市	
森井	隆文	愛知県一宮市	○
森田	誠司	東京都	○
森本	涼介	島根県中山間地域研究センター	○
 や			
柳沼	嘉偉斗	九大院・地社	○
安川	怜志	広島県	○
柳原	健人	東京農大・昆虫	○
山川	遼	愛媛大学農学部	
山口	葵羽	愛媛県	
山口	浩貴	倉敷市	
山崎	建吾	大阪府	
山迫	淳介	農研機構	○
山地	治	岡山県	○
山田	航	厚木市	○
山本	ひとみ	北大総合博物館	

よ

吉田	正隆	徳島市	○
吉田	貴大	愛媛大学	○
吉富	博之	愛媛大学	○
吉永	侑生	倉敷市自然史博物館むしむし探検隊 岡山市	

り

李	暁峰	愛媛大学
---	----	------

わ

脇	悠太	香川県	○
和田	薰	明星大学（東京都）	○
渡辺	昭彦	岡山県倉敷市	○

---

日本甲虫学会 第 15 回大会 講演要旨集

The 15th Annual Meeting of the Coleopterological Society of Japan

The Abstract of Presentations 2025

2025 年 11 月 12 日発行

編集：武田寛生・武田雅生

発行：日本甲虫学会第 15 回大会事務局（〒 710-0046 岡山県倉敷市中央 2-6-1 倉敷市立自然史博物館内）

大会事務局：奥島雄一